卓　　話

平成 23 年 7 月 5 日

『連合農学研究科　ー歴史とビジョンー』

岐阜岐阜大学連合農学研究科　教授　鈴木 徹様
（米山奨学生担当教員）

私は、今回奨学金の援助をしていただく事になった中国からの留学生、賀健龍君の指導教員でありますが、岐阜大学連合農学研究科の研究科長補佐という立場からも、長年に渡る多数の留学生に対する援助に対しロータリークラブの皆様方に、心から感謝申し上げます。

岐阜大学連合農学研究科は、創立 20 周年を迎えました。これまでに、賀君以外にも岐阜大学連合農学研究科の私費外国人留学生が米山ロータリークラブの奨学金によって学位取得を達成してきたと聞き及んでおります。

さて、農学は、世界の食糧生産、環境問題、バイオテクノロジーなどの諸問題を扱う大変重要な学問分野であり近年急速に発展し、社会的な重要性を増しています。ご存知のように、現在、大気の CO2 濃度上昇を原因とする温暖化による地球の激変を迎えております。また、2050 年には地球上の人口は 100 億人に達すると予測されています。こういった中で、地球規模での森林保護や砂漠の緑化、生態系の保護、食糧の増産、安定供給と流通、塩害、土壌の酸性化、乾燥に耐えうる新しい作物の育種、バイオエタノールやバイオジーゼルなどの石油に替わる再生可能エネルギー、最新医療技術や健康科学を支えるバイオテクノロジーなど、農学がカバーしている諸分野は 21 世紀の人類と地球の生き残りを賭けた最先端、最重要の学問分野となったと言えます。この分野での優秀な研究者、技術者を養成することは我が国にとっても、世界にとっても急務であると言えます。

30 年ほど前の時代は、正に日本の高度成長期で大学においては工学部の拡充が積極的に行われていました。一方、社会の農学に対するニーズも今ほど高くはなく、日本国内の農業自給率が急送に減少し、農業事業者の人口比からいって、農学部自体を縮小させるべきというような不見識な極論を語る国会議員、政府関係者までいた時代であったようです。実際には、日本の“農学部”は、諸外国における農学部、畜産学部、林学部、バイオテクノロジー学部、獣医学部といったそれぞれが学部に相当する規模の分野を、その下の単位の学科が担当しているという誠に貧弱な陣容であるに過ぎませんでした。この時点では、我が国には農学系の大学の博士課程は、旧制帝大に有るのみで、この分野での我が国における研究者、技術者の数は欧米に比べはるかに劣っていました。岐阜大学を含めた全国の多くの国立総合大学には農学部が設置されておりましたが、当時は修士課程までしか有りませんでした。この分野の産業を牽引し社会をリードする能力を有する優秀な研究者、技術者を育成するためには、やはり新たな博士課程の創設が必要であるということになってきたわけであります。

しかしながら、それぞれの大学で単独で博士課程の教育を行うには、その当時の教員の数や研究の水準ともに充分ではありませんでした。そのため、25 年前から、東京農工大、岩手、愛

媛大学、鹿児島大学、鳥取大学、岐阜大学、がそれぞれ基幹校となって 20 大学がそれぞれ 3～4 校ずつ連合する事によって６つの連合大学院という組織が順次、作られました。同様に、獣医学の分野でも全国 8 大学の農学部獣医学科が連合して、岐阜大学、山口大学を基幹校として二つの連合獣医学研究科がほぼ同時期に作られました。

20 年を経て、岐阜連農ではこれまでに約 700 名を超える修了生、社会人に学位を授与してきており、その約半数が海外から、特にアジア地域からの留学生であります。彼らは、ある者は、母国に帰国し各大学で中核となる地位を獲得し活躍し、有る者は日本国内の会社に勤め、我が国と彼らの母国との間で双方の文化と科学技術の両方を理解し企業の海外進出の大きな力となっています。

ほぼ同時期に作られた六つの連合農学研究科の修了生を全部あわせると 1 万名に近い修了生がアジアを中心とした世界で活躍しているという状況が 20 数年年経った現在までに実現したということは、予想を超えたすばらしい実りであると言えるでしょう。

私たち、大学人はこれまで、学生を教育し一人前にして社会に送り出す事に、ただひたすら力を注いで来ましたが、優秀な人材が各国の様々な分野、大学や政府機関の中枢で活躍しているということは、食糧、環境、代替エネルギーといった地球規模で起きている緊急事態に対応するための素晴らしい人的ネットワークが自然と出来上がっていた訳です。世界が今、真に必要としている専門家の国際的ネットワークを 20 年賭けて知らず知らずのうちに創ってきたという事に気が付かされました。

中東諸国では、Face book というような携帯電話やパソコンによる新しいコミュニケーション手段がもたらした一般の人々の緩やかなネットワークで社会の大転換を引き起こす事が出来たのだから、農学という科学的な知識や理念を共有する人々が国境を超えて連携できたとしたら、一体どんなことが可能になるのか？　大変楽しみであります。これからは、全国６つの連合農学研究科が協力してこういった世界中で活躍している修了生が連携できるよな、新たな土台作りをしたいたいと考えています。

本日、ヒトの輪、繋がりを尊重するロータリークラブの考え方に触れさせていただき、大きな感銘を受けました。まさに私たちが今後目指していく、ネットワークのお手本というように思います。ロータリークラブの皆様の活動に敬意を表するとともに、多くの奨学金の援助を受けた留学生とともに深く感謝いたします。